

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 『金光明最勝王経』平安初期点コーパスによる動詞連用形音便形の分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-07-25 キーワード (Ja): 訓点資料, コーパス, 音便形, 動詞, 平安初期 キーワード (En): kunten materials, corpus, euphonically changed form, verbs, 9th century 作成者: 柳原, 恵津子 メールアドレス: 所属: 日本女子大学 学術研究員
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000512">https://doi.org/10.15084/0002000512</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NoDerivatives 4.0 International License.



# 『金光明最勝王經』 平安初期点コーパスによる動詞連用形音便形の分析

柳原恵津子

日本女子大学 学術研究員／国立国語研究所 共同研究員

## 要旨

平安初期は『万葉集』などから萌芽が見られた音便形が拡大しはじめる時期にあたるが、この時期の仮名書き資料は訓点資料に質量ともに偏っており、全数調査が困難であった。本稿では近年公開された『日本語史研究用テキストデータ集』所収『西大寺本金光明最勝王經平安初期点』の「ひまわり」版、および『日本語歴史コーパス』(CHJ) 所収『平安時代篇 II 訓点資料』を用いて、当該資料巻1 訓読文に見られる四段活用・ラ行変格活用・ナ行変格活用動詞連用形の語形の全数調査を試みる。まず形態論情報付きコーパスであるCHJ版で四段活用・ラ行変格活用・ナ行変格活用動詞の連用形を検索すると、四段活用動詞334例、ラ行変格活用動詞20例が確認できる(ナ行変格活用動詞連用形はなし)。これらのうち、音便形と関わりが深い「四段活用動詞連用形+て」「ラ行四段活用動詞+ぬ」という条件下で語尾が1音節1字で書かれた非音便形の確例は11例(ハ・ラ行四段、ラ変)見られる。また「ひまわり」版で確認するとさらに3例の非音便形確例(マ・ラ行)が確認できる。そして助詞用法で多用され、早くから音便形も見られる「において」「もちて」などの常用語は頻繁に用いられるためにヲコト点1個や訓漢字1字で表記されており、このような語に関しては加点が多くあるものの音便形／非音便形の判定はできない\*。

**キーワード:** 訓点資料, コーパス, 音便形, 動詞, 平安初期

## 1. はじめに

西大寺本『金光明最勝王經』(以下『最勝王經』)は、830年頃と推定できる白点と永長2年(1097)の朱点が加点された訓点資料である。このうち白点による平安初期点は、全10巻にわたって水準の高い訓点が詳細に記入されたもので、春日政治が優れた訓読文と本資料についての研究(春日1942)を公刊したことによって、主要な平安初期の言語資料として広く用いられてきた。平安初期(9世紀)は日本語史のあらゆる側面において重要な変化が生じた時期であるにもかかわらず、『万葉集』や記紀(歌謡・割注)をはじめとした上代文献と『竹取物語』『古今和歌集』以降発展を遂げる中古和文の間の、仮名書きされた資料が比較的乏しい時期にあたる。また、平安初期は日本語の文体史の重要な系譜のひとつである漢文訓読体の発生期でもある。このような諸点から、訓点資料は質量ともに平安初期の日本語を伝える資料の中心的な役割を占めてきたにもかかわらず、解読の困難さや聖教という資料群特有の閲覧・出版の難しさなどが要因となって、先行の論や訓読文を再検証し、次の研究を助ける総索引・電子化テキストが慢性的に不足してい

\* 本研究は広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」の国語研ユニット「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷」、JSPS 科学研究費基盤研究(C)「記録体における助字類の用法の形成過程に関する記述的研究」(24K03936)の助成によって行われたものである。また、本稿は国立国語研究所「言語資源ワークショップ2024」インタラクティブセッション(2024年8月29日、オンライン)で発表した内容に基づいている。席上その他ご教示いただいた諸氏に厚くお礼を申し上げる。

るという現状がある。

このような中、近年、『最勝王経』平安初期点巻1を対象とした訓読文コーパスとして、国立国語研究所『日本語史研究用テキストデータ集』所収『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』（以下「ひまわり」版）<sup>1</sup>、および『日本語歴史コーパス』（CHJ）所収『平安時代篇 II 訓点資料』（以下CHJ版）<sup>2</sup>が作成・公開された。原文となる訓読文は春日（1942）を参照しつつ2013年に公刊された影印本（総本山西大寺（編）2013）を用いて新たに作り直したものである。訓読文本文の電子化が、これまで目視・手作業で用例を収集するほかなかった本資料での全数調査を格段に簡便にすることは言うまでもない。

本稿では、この既公開のコーパスを活用して動詞（四段活用動詞・ラ行変格活用動詞・ナ行変格活用動詞）連用形に音便形／非音便形がどのように出現しているかを調査し、従来言及することが難しかった全数調査から見えてくる本資料の音便史上の位置付けを改めて試みたい。

## 2. 先行研究の概観

調査に先んじて、先行研究で指摘されてきた音便形の例を整理しておく。まず本資料に見られる音便形の例を春日（1942）および肥爪（2019）で確認し、次に築島（1969）に挙げられた830年前後の音便形の例を確認する。

### 2.1 春日（1942）、肥爪（2019）による『最勝王経』平安初期点の音便形の例

春日（1942）は「研究篇」で本資料に見られる音韻上の特徴も詳細に整理しており、音便に関しては本資料中で確認できる全例として以下の4例を挙げる（春日1942: 研究篇50頁）。

- (1) 時に四（はしら）の如来は亦鷲峯に詣<sup>マウ</sup>デたまひて、（巻1, 10頁13～14行目<sup>3</sup>）
- (2) 時<sup>(と)</sup>序<sup>キツイデ</sup>を乖<sup>ソむ</sup>か<sup>じ</sup>不（巻6, 102頁6行目）
- (3) 一年の中に<sup>オ(左傍)</sup>撫<sup>イテ</sup>（巻9, 175頁17行目）
- (4) 死ヌル苦に<sup>サイダ</sup>先<sup>イテ</sup>来（ち）て（巻10, 195頁3行目）

(1)は「マキデ」→「マウデ」のウ音便の例である。この時期のウ音便は音変化の経緯がさまざまで、平安後期以降多く見られるヒヤビ・ミから転じた例を含めれば<sup>4</sup>撥音の一種を表記した可能性も一応考慮する必要があるが、この例は「キ」から「ウ」に転じたものと考えるのが妥当なようである<sup>5</sup>。(2)・(3)・(4)は「ツギテ」→「ツイデ」, 「オキテ」→「オイテ」, 「サキダチテ」

<sup>1</sup> 巻1 訓読文のテキストファイル（「巻一訓読文 (txt)」）、体裁・表記などに関する情報をタグ付けしたXMLファイル（「巻一訓読文 (xml)」）、検索用インターフェイス「ひまわり」で簡易な検索を可能にした「ひまわり版データセット」の3点で構成される。2021年11月公開。

<sup>2</sup> CHJ所収の他の資料のコーパスと同様に形態論情報が付されており、さまざまな条件で検索ができる。2022年3月公開。

<sup>3</sup> (1)～(4)の訓読文は春日（1942）により、丸括弧内には巻、春日（1942）の頁数行数を記す。なお、引用部の下線は本稿執筆者による（以下同）。

<sup>4</sup> 藤枝（1955a, 1955b）、築島（1969）373・377頁、肥爪（2019）第3部第2章など。

<sup>5</sup> 築島（1969）370頁。同書372頁でさらに「マ<sup>キ</sup>ヅ→マ<sup>ウ</sup>ヅのやうに、キからウ（wi > u）に転じたのは、

→「サイダチテ」と転じた例で、「イ音便は最初、キ・ギから転じたものが生じ、次いでシからのものが生じた。前者は既に平安初期から見られる。」との築島（1969: 365）の記述どおり、キ・ギから転じたイ音便の例がいち早く現れている。

このほかに春日は音便形か否かを考慮すべき例のひとつとして「<sup>スクテ反</sup>救」（巻3, 45頁22行目）を挙げるが、「他の場合に照合してさうでないやうである」と判断している。これに対しては、肥爪（2019: 408）も促音便の早い例として「もて（くもちて）」のみ上代から現れるものの、ハ行動詞連用形語尾の促音化の例は「スクテ反」の例のあと100年ほど確例はなく、仮に促音便と認めるにしても後の例との連続性はないと見るのが妥当と判断している。和訓であるにもかかわらず「スクテ反」と反切に記すはずの「反」が添えられている点も不審で、この書式で書かれた和訓（一定数例が見られる）と本点との典拠の違いといった観点も併せ、慎重に扱うべき例であろう。また、さらに肥爪（2019: 307）は体系的な活用形の変化ではなく個別の事例と注記しながら「<sup>ツカマツル</sup>承」（巻2, 40頁8行目）を「ツカヘマツル」から転じたm撥音便非表記の例として指摘した上で、「ツカマツル」の例以外、本資料に撥音便・促音便の可能性を考慮すべき例は見いだしがたいとしている。

## 2.2 築島（1969）による上代～平安初期・中期の音便形の例

音便形の萌芽が『万葉集』の段階ですで見られることは周知の事実であるが、体系として多くの語に広がり始めるのは先述のとおり平安初期とされている。訓点資料はこの時期の仮名を交えて書かれた資料として質量ともに重要であるため、萌芽期の音便研究は中田祝夫、築島裕をはじめとした訓点資料の研究者がしばしばかわる形で進展した。中でも、イ音便・ウ音便・撥音便・促音便すべてについて豊富な用例とともに整理した築島（1969: 363-384）は今日もなお参照すべき重要な論考である。本節では築島が挙げる例の中から、本資料について考える上で見るべき例を中心に確認しておく。

### 2.2.1 イ音便

イ音便の早い例として「かき（搔）」から「かい（櫂）」に転じた「麻可治加伊奴吉」（『万葉集』巻17・3993）、「賀伊乃散鴨」（同巻10・2052）があることは知られているが、これに続く例として築島（1969: 363-384）は以下をはじめとした諸例を挙げ、平安初期にまずキ・ギから転じたものが見られはじめ、平安中期初頭以降シから転じた例が現れると述べる。

- (5) 次ツイデ 垣牆ツイカキ（『願経四分律』810年頃）
- (6) 紀ツイて 銚トイこと 敏トイこと（『大唐三藏玄奘法師表啓』850年頃）
- (7) 縦（ホシ）イ（マ、ニ） 帯ハイ（て） 襲ツイ（て）（『漢書楊雄伝』948年）

母音iの脱落とwの母音化（この点には尚問題もあるが）との現象であつて」と述べ、類例を多数挙げる。また、春日（1942）も類例として『万葉集』など上代から既に例が確認できる「まをす→まうす（申）」を挙げながら「マヲス・マキヅのヲ・キがウ音となるのは、子音wがその発音調音位置の近似から母音uに引かれて母音o・iは脱落したものであつて、両者同一の音韻変化とみるべきである」とする（研究篇51頁）。

- (8) 下クタイて 臥 (フ) イ (て) (『守護国界主陀羅尼經』 900 年頃)  
 (9) 脅オヒヤカ<sup>イ</sup>テ 可クトモ起オコ<sup>イ</sup>ツ (『大唐西域記』 950 年頃)

(8) (9) に「クダシテ」「フシテ」「オビヤカシテ」「オコシツ」の例が挙げられる以前はカ・ガ行の例のみで、春日 (1942) もカ・ガ行から転じた例のみ 3 例指摘している。

### 2.2.2 ウ音便

先述のとおり築島 (1969) も、ウ音便は音変化のあり方が多様でなお検討の余地があると述べる。イ音便と同様に『万葉集』からすでに「麻<sup>ウ</sup>字之たまへれ」(巻 18・4094, まをす(申)→まうす), 「麻<sup>ウ</sup>字氣ず」(巻 18・4125, まく(儲)→まうく)などの例が確認でき、前者は wo の o の脱落および w の母音化 (w → u), 後者は u の挿入されたものと築島 (1969: 370) は分析する。

- (10) 徐ヤ<sup>ウ</sup>ヤク (『願經四分律』 810 年頃)  
 (11) 詣マ<sup>ウ</sup>テ (『金光明最勝王經』 830 年頃)  
 (12) 辨マ<sup>ウ</sup>ケ (『金剛般若經集驗記』 850 年頃)  
 (13) 馥カ<sup>ウ</sup>ハシ 徐ヤ<sup>ウ</sup>ヤク 陶ネ<sup>ウ</sup>シ (『地藏十輪經』 883 年)

平安期の早い例としては上記のものなどが挙げられているが、『願經四分律』『地藏十輪經』に見える「ヤウヤク」は「ヤヤク」への u の挿入, 「ヤクヤク」からの k の脱落 (ただ, この変化は総じて中期以降に見られる), 「ヤヲヤク」の wo が u に転じたとするなどの諸説があり, ウ音便の音便形の解釈の難しさに留意する必要がある。「マウケ」は『万葉集』巻 18・4125 と同じ「マケ」への u の挿入例, 「ネウシ」は「ネヤシ」のヤからウに転じたものである。このようにウ音便化には多様な経緯があるが, 「カナヒテ」→「カナウテ」のような動詞連用形語尾部分の体系的な音便化は平安中期以降広がるとされ, 春日も四段活用動詞連用形の音便化の例ではない「マウデ」のみを挙げる。

### 2.2.3 撥音便

築島 (1969) によれば平安期の撥音には n と m の区別があるが<sup>6</sup>, とともに平安初期から例が見られるとのことである。

n 撥音は古くはニ・リから転じたもののみで無表記, 平安中期からムで書く例が, 後期からンで書く例が見えはじめるとする。

- (14) 蔵<sup>ニ</sup>薤スイトサカ<sup>ナ</sup>リ (『大唐三蔵玄奘法師表啓』 850 年頃, サカリ→サカ<sup>ナ</sup>)  
 (15) 奈世无<sup>ニ</sup>尔加 (『有年申文』 867 年, ナニセムニカ→ナ<sup>ナ</sup>セムニカ)

<sup>6</sup> このほか奥村 (1955), 迫野 (1987), 沼本 (1988) らによる「ウ」表記されるタイプの ng, これらの諸説を再整理した肥爪 (2019) による語中・語末での差異などの議論があるが, 検討したいのが 830 年前後であるため, 本稿ではひとまず築島 (1969) が整理した範囲で捉えることとする。

- (16) 成ナムヌ (『成唯識論』1020年頃)  
 (17) 定タンヌ (『秘密曼荼羅大阿闍梨耶付法伝』1060年頃)

m 撥音はヒ・ビ・ミ・ヘなど唇音がムで表記される例が現れる。

- (18) 勝フムタ (『四分律行事鈔』850年頃, フミタから)  
 (19) 髣タ、ムテ 歴エラムテ (『漢書楊雄伝』948年, タタミテ, エラビテから)

ともに例が見えるのは850年以降とされており、『最勝王経』はそれより20年ほど遡る資料という位置付けになる。

## 2.2.4 促音便

促音便の早い例は『万葉集』の「何物母氏か」(巻15・3733)の「モテ」が「モチテ」から転じた例として知られているが、訓点資料中は9世紀前半から例が見られるイ音便よりやや下の9世紀半ば過ぎから見られる。

- (20) 令召ノタマフ (『金剛波若経集験記』850年頃, ノリタマフから)  
 (21) 持モテ 已ヲハテ (『地蔵十輪経』883年, モチテ, ヲハリテから)

『万葉集』に既に「モテ」の例が見られるが、幅広い動詞で体系性をもって現れるのは本資料の加点時期より下とされており、本資料に多様な例が見られる蓋然性は低いと考えるのが自然である。

これらを整理すると、830年頃加点の『最勝王経』平安初期点に見えて自然であるのは①イ音便(キ・ギから転じた例)、②ウ音便(ただしkの脱落などこの時期にはないタイプもある)で、③撥音便は「ツカマツル(承, m 音便無表記例, 本資料)」以外は850年まで確認されておらず、④促音便も『万葉集』の「モテ」の例があるものの、訓点資料で見られるようになるのはやはり850年以降とされ、本資料にも例はないと見なされてきた。

## 3. CHJ 版を用いた動詞連用形音便形／非音便形の分析

春日(1942)や築島(1969)の指摘する例から、平安初期には体系的な音便化の例である四段活用・ラ行変格活用・ナ行変格活用動詞語尾部分ではなくそれ以外の位置で起きる個別的な事例(「サイダチテ」「ツカマツル」など)に重要な例が多いことがわかるが、本稿では動詞連用形(およびそれらが連語化した「おいて」「もちて」)のみを分析の対象として、コーパスを用いた全数調査から指摘できることを述べたい。調査の手順としては、まず形態論情報付きのコーパスであるCHJ版で四段活用動詞の連用形を収集して分析可能なことを述べ、その後、詳細な表記の調査が必要な語についてCHJ版より原本での表記に関するアノテーションを多く残す仕様で作成された「ひまわり」版で検索し、分析を行う。



3.1 四段活用動詞連用形

まず四段活用動詞全般について見る。CHJ 版で [品詞（大分類）→動詞] + [活用型（大分類）→文語四段] + [活用型（大分類）→連用形] という条件で短単位検索をすると 334 例の用例が得られる（表 1）。

表 1 『最勝王経』平安初期点巻 1 四段活用動詞連用形の用例数

活用型	後接	1 音節表記	用例数	計
文語四段 - カ行				55
	き	×	2	2
	て	×	27	27
	中止	○	4	4
	連用	○	7	22
		×	15	
文語四段 - サ行				45
	き	×	1	1
	けり	×	1	1
	つ	○	2	5
		×	3	
	て	○	2	20
		×	18	
	中止	○	4	8
		×	4	
	連用	○	1	10
		×	9	
文語四段 - タ行				86
	て	×	79	79
	中止	○	1	1
	連用	○	1	6
		×	5	

文語四段 - ハ行				42
	けり	×	2	2
	たり	×	2	2
	て	○	1	24
		×	23	
	ぬ	×	4	4
	中止	○	3	6
		×	3	
	連用	○	1	4
		×	3	
文語四段 - バ行				3
	て	×	3	3
文語四段 - マ行				12
	て	○	2	4
		×	2	
	中止	○	1	1
	連用	○	7	7
文語四段 - ラ行				91
	て	○	7	43
		×	36	
	ぬ	○	3	19
		×	16	
	も	○	2	3
		×	1	
	中止	○	6	8
		×	2	
	連用	○	8	18
		×	10	
総計				334

動詞連用形の後方一語目に共起する語は、過去・完了の助動詞「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」接続助詞「て」、係助詞「も」、複合動詞後項や補助動詞（たまふ）（表中には「連用」と表記）で、このほか中止法の例も見られる。表中「1 音節表記」の欄には語尾部分が音便形／非音便形の判定に有意な 1 音節 1 字の仮名やヲコト点で書かれているか否かを示す。この判定は「ひまわり」版を用いてはじめて可能だが、本表に合わせて記す。

CHJ 版検索結果の原文 KWIC 欄（または原文文字列欄）の本文は、ヲコト点による加点部分が平仮名、仮名点加点部分が片仮名、作業者が補読した部分が丸括弧付き平仮名で記されており、

音便形／非音便形の判定に必要な語尾部分が仮名書き・ヲコト点・加點なしのいずれであるのかのみ特定できる。

### 3.1.1 ラ行四段活用動詞連用形＋完了の助動詞「ぬ」

まず、かなり後の例ではあるが (16) (17) の例が知られ、後続の鼻音 *n* に引かれて撥音化する可能性のあるラ行四段活用動詞連用形＋完了の助動詞「ぬ」のケースを見る<sup>7</sup>。

表2 ラ行四段活用動詞連用形＋「ぬ」  
の動詞語尾「り」表記

表記	用例数
仮名点「り」	3
補読（り）	8
ヲコト点（表記保留）	8
計	19

- (22) (前略) 菩薩と人と天と大衆と龍神八部と (、) 既に雲のコトク集<sup>ス</sup>り已<sup>ス</sup> (。)(20K 西金 0830\_01001・26530・082<sup>9</sup>)
- (23) 一切の諸の海の水 其の滄の數をは知<sup>ス</sup>(り)ヌ可し。(20K 西金 0830\_01002・14080・150)
- (24) 垢ツキ穢れたること有ル者は身清潔になりヌ (。)(20K 西金 0830\_01002・8970・131)

(22) は仮名点1字によって「り」が書かれており、前後が漢文本文に挟まれているため、訓漢字などではなく「り」の音節そのものが記された非音便形の確例と考察できる。同様の例として、ほかに「(供養し) たてまつり已<sup>ス</sup>」(開始位置 38380), 「作り已<sup>ス</sup>」(開始位置 47680) の2例があり、これらも非音便形の確例と判断できる。3例すべて後続の「ヌ」が漢文本文の「已」に加點されている例で、「集」「養」「作」自体に「ぬ」まで加點される場合より解読が難しいため「り」を添えたように見える。(22) の例直前の78行目にも「集(り)ヌ」(開始位置 25410) があるが、こちらは「集」に「ヌ」のみを加點し「り」の加點はない。

(23) は活用語尾部分の加點がない補読の例で、蓋然性は高くないが、一応撥音の無表記の可能性を考慮すべきである。8例のうち「知(り)ヌ」の例が4例、ほかは「集(り)ヌ」「入(り)ヌ」「還(り)ヌ」「已(り)ヌ」が各1例である。「知(り)ヌ」4例のうち3例は同じ偈頌で修辞上の技巧として繰り返し用いられた例である。2.2.3節で確認した(14)の「サカナリ」が850年頃の例としてあり、これらの例のみから音便形／非音便形の断定はしにくいだが、いずれも

<sup>7</sup> 短単位検索の方法は、[キー：活用型（小分類）文語四段 - ラ行] + [後方共起条件：キーから1語、語彙素→ぬ]。

<sup>8</sup> 「已」は本資料で多く助動詞「ぬ」を加點する（(26) (27) 参照）。

<sup>9</sup> 本節では用例本文にはCHJ版検索結果の「原文 KWIC」欄の本文を用い、出典は（CHJ サンプル ID・開始位置・原本での行数）を記す。原本での行数は総本山西大寺（編）（2013）によった。



加点が省かれうる常用語と言えること、(22)のように先後の表記上の条件によっては「リ」が加点されることなどから、常用語ゆえの加点の省略と見なすのが妥当であろう。(24)は「になり」の部分がヲコト点で記されているが、2音節以上をひとつのヲコト点で表している場合には音便形／非音便形を判断する資料とならないのが基本であるため、(22)より扱いを慎重にして、表記を詳細に確認する必要がある（第4節参照）。

なお、「リ」と並んで「ニ」も平安初期から撥音便の例が見られるが、ナ行四段活用動詞の例は確認できない。

### 3.1.2 四段活用動詞連用形＋接続助詞「て」

四段活用動詞連用形＋接続助詞「て」（「において」「もちて」を含む）の該当例は200例で、カ行27例、サ行20例、タ行79例、ハ行24例、バ行3例、マ行4例、ラ行43例である。

表3 四段活用動詞連用形＋「て」の動詞語尾表記

加点の有無	記号	用例数	
加点あり	仮名点	60	88
	ヲコト点	28	
加点なし		112	
計		200	

このうち、音便化の対象となる活用語尾部分にヲコト点または仮名点の加点があるのは88例で、カ行6例（置く（全例「において」））、サ行9例（降して、発して、起して、有<sup>いま</sup>して、成して、見（そ）ナはして）、タ行51例（持つ（全例「モチテ」））、ハ行9例（酔<sup>な</sup>ひて、たまひて、オモひて）、マ行2例（銜<sup>フ</sup>みて、蹬<sup>フ</sup>みて）、ラ行11例（為<sup>な</sup>りて、促マリて／（ま）りて、量りて、上りて、たてまつりて）である。

これらの中で、原文 KWIC 欄の本文の表記のみから、語尾の部分が仮名点1音節分、ヲコト点1音節分が独立した仮名・ヲコト点で書かれていると判断できる例、すなわち非音便形の確例と言える例は、以下の7例である。

- (25) 酔<sup>な</sup>ひて (20K 西金 0830\_01002・52080・246)  
 繞<sup>な</sup>りて (20K 西金 0830\_01001・4180・013)  
 歴事へ(た)(て)(ま)(つ)りて (20K 西金 0830\_01001・7570・023)  
 礼(し)(た)(て)(ま)(つ)りて (20K 西金 0830\_01001・18580・055)  
 促(ま)りて (20K 西金 0830\_01002・10580・139)  
 量<sup>な</sup>りて (20K 西金 0830\_01002・15380・153)  
 上<sup>な</sup>りて (20K 西金 0830\_01002・51580・245)

ハ行1例, ラ行6例と例の見られる行に偏りがあるのは, 非音便形の分布状況を表しているのではなく, ヲコト点の体系や仮名点の一部として用いる訓漢字のあらわれ方によるのだろう<sup>10</sup>。

築島(1969)はハ行動詞連用形語尾が音便化する早い例として『和名類聚抄』(937年)の「繡訓沼無毛母」(ヌヒモノ→ヌムモノ, m音便(築島1969: 376)), 龍光院本『大毘盧遮那経』(1058年)の「者イフツル」・大東急記念文庫本『大日経義釈』(1074年)の「胎タマフテ」「訪トフラフテ」「負オフテ」(イヒツル・タマヒテ・トブラヒテ・オヒテから, いずれも促音便またはウ音便<sup>11</sup>)を挙げており, これらより早い加点の本資料で非音便形なのは自然である。

ラ行動詞は『金剛波若経集験記』(850年頃)の「令召ノタマフ(ノリタマフから)」のほか, 聖語蔵・東大寺図書館蔵『地藏十輪経』(元慶7(883)年加点)の「已ヲハテ」「妄イツハテ」(ヲハリテ・イツハリテから)などの例が築島(1969: 379)に挙げられているが, 「ノタマフ」の例から20年ほど早い本資料で「リ」の表記例が複数見られること, 非音便形の確例が見られないことは着目に値する。

上記仮名点7例以外の, 仮名点で加点された53例およびヲコト点で加点された28例は, 訓漢字や複数音節をひとつのヲコト点で記した可能性を考慮しなければいけない, この段階で音便形／非音便形の判定ができない例である(4.2節参照)。

また活用語尾部分の加点がなく接続助詞「て」のみが加点された語尾部分補読の例は112例見られ, むしろこちらが大半である。

- (26) カ行 21例 退(き)て(7例), 説(き)て(5例), 聞(き)て(5例), 就(き)て(1例), 却(き)て(1例), 置(き)て(1例), 往(き)て(1例)
- サ行 11例 発(し)て(1例), 尽(し)て(1例), 白(し)て(5例), 至(し)て(1例), 成(し)て(1例), 見(そなはし)て(2例)
- タ行 28例 起(ち)て(3例), 以(ち)て(22例), 放(ち)て(1例), 持(ち)て(2例)
- ハ行 15例 樂(ひ)て(1例), 違(ひ)て(1例), 欲(ひ)て(3例), 遇(ひ)て(1例), 随(ひ)て(6例), 従(ひ)て(1例), 敬(ひ)て(2例)
- バ行 3例 逮(び)て(2例), 遊(び)て(1例)
- マ行 2例 樂(み)て(1例), 前(み)て(1例)
- ラ行 32例 奉(り)て(4例), 繞(り)て(6例), 因(り)て(1例), 由(り)て(4例), 詣(り)て(3例), 語(り)て(2例), 還(り)て(1例), 縁(り)て(1例), 已(り)て(3例), 従(り)て(1例), 知(り)て(6例)

この中には『万葉集』にすでに促音化と思われる例が見られる「も(ち)て」なども含まれ, 一概に語尾部分の記載を省略したと判断するのは性急であろうが, 同時代の他資料での表記などの根拠が現時点で得られていないため, 接続助詞「て」を書き添える際の語尾部分の対処のひとつ

<sup>10</sup> 音便形を早くからとる語は複数の音節を表すヲコト点や訓漢字で示されやすい常用語であったり, 語尾が非表記となりやすいという事情もあり得るが, この語彙一覧への影響の度合いを測るのは困難である。

<sup>11</sup> 同書381ページ。これらの例は, 表記からは促音便かウ音便かは判断できないと築島は述べている。

として、読みが困難でなければ常に記載はしないという方法があったと考えておく。

### 3.1.3 その他の四段活用動詞連用形の例

ここまで、一定の用例数が得られるラ行四段活用動詞連用形+「ぬ」、四段活用動詞連用形+「て」の場合について見たが、これら以外の四段活用動詞連用形の例は 115 例である。音便化には関与しない中止形の例も含め、後方 1 語目に共起する語と表記によって簡単に整理しておく。用例数のうち□で囲ったものは、非音便形と同じ語形の例である。

- (27) つ：5 例，ぬ（ナ・ラ行以外）：4 例，たり：2 例，き：3 例，けり：3 例，も：3 例，連用（V + V 前項動詞語尾，補助動詞）：67 例，中止：28 例

〈後方 1 語目「つ」〉5 例

仮名点表記 □2 例 生シつ（1 例），致シ<sup>イ(た)</sup>つ（1 例）

加点なし 3 例 生(し)つ（1 例），発(し)つ（2 例）

〈後方 1 語目「ぬ」(ナ・ラ行以外)〉4 例

ヲコト点表記 4 例 たまひヌ（4 例）

〈後方 1 語目「たり」〉2 例

ヲコト点表記 2 例 たまひたり（2 例）

〈後方 1 語目「き」〉3 例

加点なし 3 例 在(し)キ（1 例），聞(き)しを（1 例），説(き)しを（1 例）

〈後方 1 語目「けり」〉3 例

ヲコト点表記 3 例 たまひケリ（2 例），いましケリ（1 例）

〈後方 1 語目「も」〉3 例

仮名点表記 □1 例 去りも（1 例）

加点なし 2 例 去(り)も（2 例）

〈後方 1 語目動詞・補助動詞〉67 例

カ行 22 例

仮名点表記 □7 例 聞キ（・聞<sup>キ</sup>、）（2 例），聴キ（1 例），敷キ（1 例），乖キ（1 例），ツキ（1 例），説キ（1 例）

加点なし 15 例 聞(き)（2 例），説(き)（13 例）

サ行 10 例

ヲコト点表記 □2 例 致し（1 例），示し（1 例）

仮名点表記 □1 例 生シ（1 例）

加点なし 7 例 起(し)（2 例），致(し)（1 例），生(し)（1 例），尽(し)（1 例），作(し)（2 例）

タ行 6 例

- 仮名点表記 1 例 断チ (1 例)  
 加點なし 5 例 起(ち) (1 例), 断(ち) (3 例), 絶(ち) (1 例)

ハ行 4 例

- ヲコト点表記 1 例 歌ひ (1 例)  
 加點なし 3 例 従(ひ) (3 例)

マ行 7 例

- ヲコト点表記 7 例 恭み (4 例), 惡み (1 例), 飲み (1 例), 策み (1 例)

ラ行 18 例

- ヲコト点表記 2 例 たてまつり (2 例)  
 仮名点表記 8 例 入り (2 例), 織り (1 例), 知り (2 例), たてまつり (1 例), (たてまつ)り (1 例), 昇り (1 例)  
 加點なし 8 例 入(り) (3 例), 至(り) (1 例), 已(り) (1 例), 作(り) (1 例), 取(り) (2 例)

〈中止〉 28 例

- カ行 4 例 懷キ (1 例), 聞<sup>キ</sup>、 (1 例), 説キ (1 例), 行キ (1 例)  
サ行 8 例 いまし (3 例), 生し (3 例), 為<sup>ナ</sup>し (1 例), 発し (1 例)  
タ行 1 例 起チ (1 例)  
ハ行 6 例 敬ひ (2 例), たまひ (3 例), 樂ひ (1 例)  
マ行 1 例 富み (1 例)  
ラ行 8 例 蒙り (1 例), 被フリ (1 例), (たてまつ)り (4 例), 作り (1 例), 雨り (1 例)

中止用法語尾として 28 例, それ以外の例として 30 例の非音便形と同じ語形の加點例を確認できた。「たまひ」(11 例), 「いまし」(4 例), 「たてまつり」(2 例) がヲコト点で記された 17 例はさらに表記を確認したい例である (用例数に二重下線を付けて示した)。

### 3.2 ラ行・ナ行変格活用動詞連用形

四段活用動詞のほかに連用形の音便化を考える上で確認すべき活用型に, ラ行変格活用動詞とナ行変格活用動詞がある。

ラ行変格活用動詞の連用形は 20 例あり, 表記の形態は表 4 のごとくである。

表4 ラ行変格活用動詞連用形の動詞語尾表記

加点の有無	記号	用例数	
加点あり	仮名点	3	12
	ヲコト点	9	
加点なし		8	
計		20	

後方1語目に共起する語などは、接続助詞「て」が14例、助動詞「き」「けり」が各1例、中止法が4例（ヲコト点の例2、仮名点の例2）である。仮名点の例のうち2例が中止法の（あるいは終止形の誤解析で連用形となっている）例（(28)）で、それ以外の1例が非音便形の確例（(29)）として挙げられる。

(28) 復（た）十種の希有の〔之〕法有り、是レ如來の行なり（。）（20K 西金 0830\_01002・84730・332）

(29) 復（た）菩薩摩訶薩、百の千万億の人有りて俱なり（。）（20K 西金 0830\_01001・4470・015）

ヲコト点で記載された9例については、次節で述べる。また、ナ行変格活用動詞連用形の例は、調査範囲には見られなかった。

#### 4. 「ひまわり」版を用いた動詞連用形音便系／非音便系の分析

次に、前節で得た CHJ 版の検索結果からさらに詳細な表記を知りたい例を「ひまわり」版で確認する。このデータには形態論情報は付与されていないため、手順としては CHJ 版で得られた用例を1件ずつ検索して確認するという方法をとった。

##### 4.1 ラ行四段活用動詞連用形＋完了の助動詞「ぬ」

まず、3.1.1 節で見たラ行四段活用動詞連用形＋完了の助動詞「ぬ」の例のうち、CHJ 版で音便形／非音便形の判断ができなかったヲコト点表記の加点例を見る。

(30) (= (24)) <sup>(あか)</sup>垢【つ】【き】穢【れ】たる こと有【る】者は身清潔になり【ぬ】（。）（10・082）<sup>12</sup>

「ひまわり」版の訓読文は、すべて漢字と平仮名によって記されている。検索結果画面をクリックして訓読文をブラウザ表示させると、仮名点で記された部分は1字ずつ【 】で括り、ヲコト点部分は符号ひとつ分ごとに右傍線（赤橙）を引くことで<sup>13</sup>、仮名1字、符号1個で記された範

<sup>12</sup>「ひまわり」版の用例は、ブラウザに表示される本文により、出典として「ページ番号」欄の勉誠出版版影印のページ番号・行番号を記す。

<sup>13</sup> この傍線がうまくブラウザに表示されないことがあり、要改善点のひとつである。その場合は右クリックで本文の範囲を指定すると、ヲコト点の区切りを示した傍線と同じ区切りで網掛けがかかるので、区切りを確認することはできる。

囲を知ることができる（本稿では二重下線で示す）。(30)は「潔」に「に」「なり」がヲコト点で、「ぬ」が仮名点で加点されていることがわかる。

このように表2「ヲコト点 り」の8例について「ひまわり」版で表記の詳細を確認すると、全例ヲコト点「なり」で示された例とわかる。このヲコト点で「り」が撥音化した「ナ n」を示している可能性を否定はできないが、ヲコト点「なり」は動詞「なる」の連用形のほか助動詞「なり」の終止形を示すこと（本資料巻1には60例見られる）、助動詞「なり」や動詞「なる」の表記に主に用いられるヲコト点には、「なり」「なる」の二種の活用形を表すための点が用意されていて（同様のものに「あり」「ある」などがある）、すべての活用形をひとつの点で表す「たまふ」「います」「たてまつる」などより表音性がやや高い可能性があることなどから、非音便形を表している蓋然性はある程度認められるように思われる。

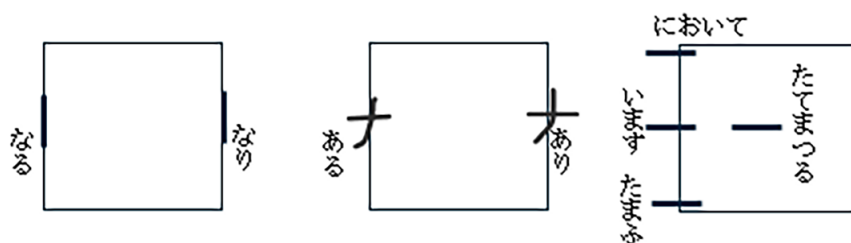


図1 ヲコト点図（一部）※築島（2009）から抜粋，および一部修正

このような断定の難しさは残るものの、「ひまわり」版での精査により、表2「ヲコト点 り」8例の中に、音便形／非音便形の確例は見られないと結論することができる。

#### 4.2 四段活用動詞連用形＋接続助詞「て」

次に表3「四段活用動詞連用形＋接続助詞「て」」に「加点あり」と示した88例のうち、(25)に挙げた非音便形の確例7例を除いた81例（ヲコト点28例，仮名点53例）を「ひまわり」版で確認する。

まず、ヲコト点表記の28例について、語尾の部分がどのヲコト点で記されているかを整理すると以下ようになる。

(31) ～して 9例（おこして3，なして3，くだして1，みそなはして1，いまして1）

→ヲコト点「して」8例，ヲコト点「います」＋ヲコト点「て」1例

たまひて 7例（全例補助動詞用法）

→全例ヲコト点「たまふ」＋ヲコト点「て」

おいて 6例（全例助詞的な「において」）

→全例ヲコト点「において」

たてまつりて 3例（全例補助動詞用法）

→全例ヲコト点「たてまつる」＋ヲコト点「て」



～みて 2 例（ふみて、ふくみて）

→ふみて（蹬みて）、ふくみて（銜みて）ともにヲコト点「み」＋ヲコト点「て」

なりて 1 例

→ヲコト点「なり」＋ヲコト点「て」

上記のほとんどが語尾部分を含めた前後をひとつのヲコト点で表記している音便形／非音便形の判定が不可能な例である。ただ「ふみて」、「ふくみて」の2例のみともに「ヲコト点「み」＋ヲコト点「て」」と表記されていて、これらは非音便形の確例と言える。850年頃の『四分律行事鈔』の「フムタ」が「ふだ（札）」の古い形「文板（ふみいた>ふむた）」で動詞連用形語尾部分の例ではないものの知られているほか、948年加点の『漢書楊雄伝』に動詞連用形の m 撥音便「ム」の例が見られ（襜タ・ムテ 歴エラムテ）、本資料の非音便形は注目に値する。

なお、本稿ではここに挙げた助詞的な「において」のみ音便形で記している。漢字左上に横棒を記すヲコト点は、春日（1942）の点図では「ニ於テ」と記すことで語形の判断が回避されているが、同書の訓読文では「において」と読んでいる。一方、築島（2009）では「におきて」としている。春日は（3）の「おいて」の加点例があること、（2）（4）のキ・ギからのイ音便形の類例があることから音便形を採用し、築島は（3）の加点が左傍かつやや大ぶりの字であるために本点での確例としなかったものと思われる。本稿では、（2）ツイデ（名詞）、（4）サイダチテのように単体の動詞から常用的な表現に転じたものにはイ音便形がとられており、「において」も同様の連語であること<sup>14</sup>、本資料中確認できる異筆については記入された順序がまだわからない段階というほかなく、しかしほぼ同時期の加点と見て差し支えないこと、右傍行間に他の加点があるために左傍に書かれた可能性があることに鑑み、「において」を採用している。

また、仮名点表記 53 例の内訳は、以下のとおりである。

（32）もちて 51 例、おもひて 1 例、つづまりて 1 例

「もちて」は 51 例全例が「をもちて」の形で助詞的に用いた例で、訓漢字「以」の省画体で書かれている（(33)）。「おもひて」は「おもひ」を訓漢字「念」で「【おもひ】【て】」と記している（(34)）。これらの例も語尾部分を含む複数音節を 1 字で記しており、音便形／非音便形の判断に用いることはできない。「つづまりて」は（25）にも 1 例あり、「促（ま）りて」のように語尾の「ま」が加点のない補読、「り」が仮名点、助詞「て」がヲコト点と「り」の前後が異なる表記形態であったため、3.1.2 節の段階で非音便形であることが確認できた。これに対し（35）の例は「ま」「り」ともに仮名点で表記されており、どのような仮名が用いられているか確認する必要があったが、「ひまわり」版で確認すると「促【ま】【り】て」のように「ま」「り」がそれぞれ 1 字の仮名で、「て」がヲコト点で表記されていることがわかり、これも非音便形の確例

<sup>14</sup> 卷 1 にはカ・ガ行四段活用動詞連用形＋テの非音便形の確例が見られなかったが、異なる巻には（「(き)」を補読する例が圧倒的に多いものの）10 例程度の非音便形確例が見られる。ただ、これらの通常の動詞の例と助詞化した例とは異なる可能性があるため、音便形を採用している。

であることが確認できる。

- (33) 各各至【れ】【る】心を【もちて】、掌を合【せ】(、) 恭<sup>(かは)</sup>み敬ひ尊<sup>じ</sup>の容を瞻仰(し) たてまつる。(20K 西金 0830\_01001・26640・082) <sup>15</sup>
- (34) 常なりと【おもひ】て佛を見(たてまつり)て尊重【せ】不<sup>じ</sup>を以【て】の故なり(。)(20K 西金 0830\_01002・22840・172)
- (35) 何の因縁を以てか、釋迦牟尼如來の壽命の短【く】促【ま】【り】て、唯(だ)八十年のみます【べ】【く】【あ】【ら】【む】(。)(20K 西金 0830\_01002・1340・113)

以上から、四段活用動詞連用形+「て」の語尾仮名表記例のうち 3.1.2 節で音便形／非音便形の判定ができなかった 53 例のうち 51 例が訓漢字「以」で「もちて」全体を表記した例、1 例は同じく訓漢字「念」で「おもひ」を表記した例で、音便形／非音便形の判定に使えない用例であること、残りの 1 例は「促まりて」の「り」が仮名 1 字で書かれた非音便形の確例であることがわかる。3.1.2 節で見た「以(ち)て」や (31) に挙げた「において」と同様に、「もちて」が音便形／非音便形の判定が不可能な訓漢字「以」で表記されている。『万葉集』と 883 年頃加点の『地藏十輪經』に「もて」の例が確認されているが、本資料のこれらの例は両者が連続的な関係にあることを示すものではない。本資料の訓漢字表記は音便形を表現するためではなく、頻繁に用いる常用語であるために選ばれたものである。先行する諸氏の論の中で 8 世紀半ばと 9 世紀後半の間に關する言及が見られなかった理由のひとつとして、このような表記のあり方が挙げられるかもしれないという背景を窺うことはできるであろうが、常用語から音便化が起きる蓋然性があること、常用語だから専用の表記が用意されること、という二つのあくまで無関係な条件の重なりが、もっとも知りたい本資料での語形を判定不可能にしてしまっていると考えべきである。

#### 4.3 ラ行変格活用動詞連用形

つぎに、3.3 節で見たラ行変格活用動詞連用形のうちヲコト点表記された 9 例を確認する。

- (36) 復(た)是の念<sup>ん</sup>を作(さ)【ま】【く】、[於]無量劫(に)ありて、諸佛如來、[於]世に出現(し)たまふこと、烏曇跋華の時にありて乃(し)一(た)び現するが如し。(20K 西金 0830\_01002・27450/27720・184/185)

9 例すべてが (36) のようにヲコト点「あり」で記された例である。「あり」も 4.1 節で見た「なり」と同様に「あり」「ある」の二種の活用形にヲコト点が用意されており、「あり」が選択されているという点に表音性が含意される懸念もあるが、非音便形と断じるには至らない、音便形とも非音便形とも断定できない例である。

<sup>15</sup> このほか、「以」を「もちて」と読ませる例が 22 例あるが (3.1.2 節 (26) に含まれる)、すべて「て」のヲコト点のみを加点し、非音便形(もちて)か促音無表記例(もて)か判別できない。

#### 4.4 「3.1.3 その他の四段活用動詞連用形の例」の保留例

「3.1.3 その他の四段活用動詞連用形の例」で言及した「たまひ」、「いまし」、「たてまつり」のヲコト点表記 17 例は、「たまひたり」、「淨キ満月の如くいまし」、「礼したてまつり已(り)て」のようにヲコト点 1 つで表記されており、音便形／非音便形の判定に使えない例である。

### 5. まとめ

以上の調査から、本資料巻 1 の動詞連用形のうち、体系的な音便化に関わりの深いラ行四段活用動詞＋「ぬ」、四段活用動詞＋「て」、およびラ行変格活用動詞連用形の非音便形の確例として、以下の 14 例が確認できた。

- (37) ラ行四段活用動詞連用形＋「ぬ」、四段活用動詞連用形＋「て」、ラ行変格活用動詞連用形
- |    |               |  |
|----|---------------|--|
| ハ行 | 1 例           | えふ (酔, 1 例)  |
| マ行 | 2 例           | ふくむ (銜, 1 例), ふむ (踏, 1 例)  |
| ラ行 | [〜リヌ (n 撥音便)] | 3 例  |
|    |               | あつまる (集, 1 例), たてまつる (奉, 1 例), つくる (作, 1 例)  |
|    | [〜リテ (促音便)]   | 8 例  |
|    |               | たてまつる (奉, 2 例), つづまる (約, 2 例), のほる (上, 1 例), はかる (量, 1 例), めぐる (巡, 1 例), あり (有, 1 例) |

また、音便とは切り離して考える必要がある用法の例ではあるが、非音便形の語形が確認できるものとして以下の 30 例が非音便形と同じ語形が表記された例として確認できた。

- (38) 四段活用動詞連用形 ((37) 以外)
- |    |     |  |
|----|-----|--|
| カ行 | 7 例 | 聞キ (・聞 <sup>キ</sup> 、) (2 例), 聴キ (1 例), 敷キ (1 例), 乖キ (1 例), ツキ (1 例), 説キ (1 例) |
| サ行 | 5 例 | 致シ (2 例), 生シ (2 例), 示シ (1 例)   |
| タ行 | 1 例 | 断チ (1 例)   |
| ハ行 | 1 例 | 歌ひ (1 例)   |
| マ行 | 7 例 | 恭み (4 例), 惡み (1 例), 飲み (1 例), 策み (1 例)   |
| ラ行 | 9 例 | 入り (2 例), 織り (1 例), 去り (1 例), 知り (2 例), たてまつり (1 例), (たてまつ)り (1 例), 昇り (1 例)   |

なお、音便形の確例は得られておらず、巻 1 の範囲では、春日 (1942) 以降の諸研究で言及されてきたとおりの状況であった。

このような動詞連用形語尾部分の表記の実態を 2 節で見た築島 (1969)・春日 (1942)・肥爪 (2019) による音便形の例と対比させて位置付けをすると、以下ようになる。

〈築島・春日・肥爪の挙例と本調査の結果との対応〉

### イ音便

築島の挙例（一部）加伊（『万葉集』巻17・3993）賀伊（同巻10・2052）

次ツイテ垣ツイカキ（『願経四分律』810年頃）

春日の挙例 <sup>(と)キツイデ</sup>時序（(2)）, <sup>オ(左傍)</sup>掬イテ（(3)）, <sup>サイダ</sup>先来（ち）テ（(4)）

『万葉集』にすでに例が見え、いち早く四段活用動詞連用形「キ」「ギ」のイ音便化した例が平安初期から確認され、春日（1942）でも3例挙例されていたが、本調査では音便形／非音便形どちらの例も確認することができなかった。また、助詞的な用法で多用される「おい(き)て」がもつばらヲコト点「において」で表記されており、これらもすべて音便形／非音便形の判断ができない例である。

### ウ音便

築島の挙例（一部）麻宇之（『万葉集』巻18・4094）、麻宇氣（同巻18・4125）

徐ヤウヤク（(10)）、詣マウテ（(11)）、辨マウケ（(12)）

春日の挙例 <sup>マウ</sup>詣デ（(1)）

ウ音便にはさまざまな音便化の経緯が確認されていて、考察には留意が必要であった。本資料には春日の挙げる例（(1)）があるものの、動詞連用形の語尾部分には音便形／非音便形どちらの例も見られなかった。

### 撥音便

#### ・n 撥音

築島の挙例 葦<sup>ヰ</sup>薙スイトサカナリ（(14)）、奈世无尔加（(15)）、成ナムヌ（(16)）

肥爪の挙例 <sup>ツカマツル</sup>承（本資料巻2、40頁6行目）

築島は、古くはニ・リから転じたもののみで無表記、平安中期からムで書く例が見えはじめる。と述べた上で850年以降の例を挙例するが、これより20年ほど早い本資料（一部）での今回調査範囲から、11例の非音便形の確例が確認でき、音便形は確認できなかった。

#### ・m 撥音

築島の挙例 勝フムタ（(18)）、鬚タ、ムテ 歴エラムテ（(19)）

m 撥音はヒ・ビ・ミ・ヘなど唇音がムで表記される例が850年頃から現れるとされるが、これより20年ほど早い本資料の調査範囲にはマ行の非音便形の確例が2例（「ふくみて（銜）」、「ふみて（踏）」）見られた。また、ハ行四段活用動詞「えふ（酔）」の非音便形「えひて」、「おもふ（思）」の訓漢字「念」表記の例が各1例見られた。

### 促音便

築島の挙例 母氏（『万葉集』巻 15・3733）

令召ノタマフ（(20)）、持モテ 已ヲハテ（(21)）

春日・肥爪の挙例 救スクテ反（本資料巻 3, 45 頁 22 行目）

『万葉集』に例が見られるものの、築島は平安初期前半から例が散見されるイ音便よりやや遅れ、平安初期後半から例が見られはじめるとする。本資料中には「スクテ反」と書かれた例があるが、ハ行四段活用動詞連用形の促音便化の例は本例の次の例が 100 年後であり、春日・肥爪ともに音便形の例とは認めないのが妥当と判断している。

本調査では非音便形の例がハ行動詞 1 例、ラ行動詞 8 例得られ、『万葉集』に音便形の早い例がありながら、非音便形のみ一定数確認できるという実態が見られる。また上代の例（「もて」）が知られている「もちて」がもっぱら訓漢字「以」で表記され、原文中の「以」への加点例もヲコト点「て」のみが書かれ補読（ち）が必要な例ばかり見られる。「ありて」も同様にヲコト点「あり」で書かれた例が 9 例見られ、これらの常用語が音便形／非音便形のどちらを表記したものを判定することはできない。

このように、平安初期から音便形の例が散見され、上代にも音便形のはしりの例が確認されているタイプの動詞を含めて音便形を記述したと言える確例が見られず、850 年頃から音便形の例が知られているタイプの動詞に関しては非音便形が複数確認できるという傾向があった。また、助詞的に用いる「おいて」「もちて」、多用される「ありて」は読みを助けるために加点されることが多く、それゆえ「において」「あり」のヲコト点や訓漢字「以」がもっぱら用いられるため、語形の特定ができないという実態があった。さらに、常用語であるために語尾部分の加点がされなかったと見られる語（「て」形の語尾部分の非表記など）も多くある。

先行の論によって報告されてきた音便形の実例が知識として広く共有されているが、それ以外の例はどうか、非音便形で書かれているのか、加点がされていないのか、といった疑問があったのではないと思う。本調査で少ない言語量が対象ではあるが全数を概観したことで、音価以外の事情でヲコト点や訓漢字が用いられたり語尾部分の加点がなかったりといった表記がとられていたことがわかった。また、一定数の非音便形の確例を得ることができた。これらは新たな知識をもたらす積極的な情報とは言えないものだが、隣接する時期の資料での例と照らし合わせながら、通史の記述をやや精緻にしていけるのではないかと考える。

### 参考文献

- 奥村三雄（1955）「撥音ノの性格—表記と音価の問題—」『国語学』23: 41-49.  
 春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』東京：勉誠社。（本稿は『春日政治著作集』別巻（1985、勉誠社）による。）  
 迫野虔徳（1987）「中世的撥音」『国語国文』56(7): 41-52.  
 総本山西大寺（編）（2013）『国宝西大寺本金光明最勝王経 天平宝字六年百済豊虫願経』東京：勉誠出版。  
 築島裕（1969）『平安時代語新論』東京：東京大学出版会。

- 築島裕 (2009) 『訓点語彙集成 総論・載録文献一覧』 東京：汲古書院。  
 沼本克明 (1988) 「日本語のモーラ音素「ン」の通時的背景寸考」 広島大学教育学部日本語教育学科・留学生日本語教育 (編) 『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』 79–84. 広島：広島大学教育学部日本語教育学科. のちに『日本漢字音の歴史的研究—体系と表記をめぐって』 (1997, 汲古書院) 所収。  
 肥爪周二 (2019) 『日本語音節構造史の研究』 東京：汲古書院。  
 藤枝徳三 (1955a) 「動詞ウ音便の一考察 (上)」 『国語国文』 10(9): 54–70.  
 藤枝徳三 (1955b) 「動詞ウ音便の一考察 (下)」 『国語国文』 10(10): 46–68.

## 関連 Web サイト

- 国立国語研究所 (2021) 『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』 (『日本語史研究用テキストデータ集』 所収) [https://www2.ninjal.ac.jp/textdb\\_dataset/sksh/](https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/sksh/) (2024 年 9 月 10 日確認)  
 国立国語研究所 (2022) 『日本語歴史コーパス 平安時代編 II 訓点資料』 <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kuntten> (2024 年 9 月 10 日確認)

# Analysis of Euphonic Changes Using “Golden-Light-Sutra” Corpus

YANAGIHARA Etsuko

Research Fellow, Japan Women's University / Project Collaborator, NINJAL

## Abstract

The early Heian period was a time when the use of verbs in euphonicly changed form, which first emerged in works such as the Manyōshū, began to disseminate. However, the kana-written materials of this period are biased toward kuntten materials in terms of both quality and quantity; therefore, investigating all of these materials is challenging. In this study, we use the “Golden-Light-Sutra” corpus (Saidaiji version), Volume 1 (Himawari and CHJ editions), to examine all the conjugated verb form of group I and ラ行変格活用, ナ行変格活用, which is one of the group-III verbs. First, a search for the conjunctive verb form of group III, i.e., ラ変, and ナ変 in the CHJ edition, which has a corpus with morphological information, reveals 334 examples of group III and 20 examples of ラ変. Among them, 11 definite examples of non-euphonicly changed forms with the ending written with one character per syllable are indicated. Furthermore, based on the “Himawari” edition, three more definite examples of non-euphonicly changed forms are confirmed. Common words such as において and もちて, which are typically used as particles and possess euphonicly changed forms since early on, are written with one ヲコト点 or one 訓漢字 character owing to their frequent use. Although many additional marks exist for such words, one cannot determine whether they are euphonicly or non-euphonicly changed forms.

**Keywords:** kuntten materials, corpus, euphonicly changed form, verbs, 9th century